

T. パーソンの行為の分析の検討

—ユニットアクトのエレメント分析の見地から—

藤原 英 男

はじめに

本稿では、T. パーソンズ (Talcott Parsons) の行為の分析における主要概念に解明 (explication) を与えつつ¹⁾、これを解釈し検討する。ここでは「行為の総合理論をめざして」²⁾と「社会体系論」³⁾において展開されているものを中心にして議論を進める。そして、ユニットアクトのエレメント分析の見地から、これを行ないたい。

パーソンズは、「社会的行為の構造」⁴⁾において、行為のエレメント分析をかなり詳細に行なっている。彼はその後、フロイトやトルマンらの心理学の成果を吸収した上で、この分析をさらに発展させる。ここで検討するのは、この時期のものである。パーソンズは、この時期に、E. A. シルスとの協力のもとに、「型の変数」を完成させる。この仕事は、ここで扱う行為のエレメント分析との関連でなされたものである。その後彼は、「型の変数」をR. F. ベールズの相互作用の分析のカテゴリーと結びつける。こうして作られたのが、「AGIL」図式⁵⁾である。彼はさらに、サイバネティックスなどの考え方を吸収する。そして、この考え方も用いて、社会変動をもとり扱い得る理論を展開して、パーソンズは今日に至っている。⁶⁾ こうして展開されて来たパーソンズの理論は、「構造—機能主義」の名のもとに、社会学においてきわめて大きな影響を及ぼして来たのである。⁷⁾ さてこの様な彼の理論の発展展開には、次の2つの意図がみられる。1つは、複数の理論がとり扱っている複数の領域を、1つの理論のもとに総合しようとする意図である。⁸⁾ そしていま1つは、この総合的な理論を体系理論たらしめようとする意図である。⁹⁾

ここでは、こうした事情をふまえた上で、パーソンズの行為の分析を解釈し検討する。そして、この作業の意義は、次の2点に認められるだろう。

(1)、少なくとも上記の2点に関しては、パーソンズのもくろみの成否をたずねる時が、今日すでに来ていると思われる。そのためには、四半世紀前に彼が行なった行為の分析を、あらためて検討する必要もまたあるだろう。蓋し、理論の総合や体系化には、抽象を中心とした分析の作業が重要だからである。¹⁰⁾

(2)パーソンズの理論は難解だといわれる。¹¹⁾ ここで扱うのは、そのうちの最も難解な部分の1つである。この部分の解釈は、パーソニアン達によってさえ、細かい点にいたるまで十分に正しくなされているとは言いきれない。この部分の解釈には、解釈そのものにもある程度の意義が認められるだろう。¹²⁾

I. パーソンズによるエレメントの概念の位置づけ

まず、パーソンズがエレメントの概念をどの様に考えているかをみておこう。パーソンズによれば、あらゆる経験的な知識は、単なる現実の反映ではない。それは、ある意味で、概念的に形成されたものである。もちろん、このことは、常識的な知識についても言い得る。ただ、科学においては、現実を記述するための概念図式が、わざわざ整備されるのである。これが「記述の枠組み図式」(descriptive frames of reference)¹³⁾と呼ばれるものである。科学における記述は、この枠組みに基づいてなされる。こうして記述がなされた後に、「概念的定式化」¹⁴⁾がなされる。そしてこ

の「概念的定式化」が、科学における説明と結びついているのである。

さて、説明を行なうためには、対象をより単純なものに分解することも必要である。これは2つの方向でなされる。ここではこれらを、「ユニット分析」と「エレメント分析」と呼ぶことにする。前者においては、対象は分解されてパートやユニットになる。パートとは、ある種のユニットである。¹⁵⁾ すなわち、それは、もとの全体の他のパートとの関係を除かれても、なおその具体的存在が意味をなす限りでのユニットである。パートは、ある種のティピカルな状況のもとで、ある種のふるまいをすると考えられる。このふるまいについての一般的な陳述をすれば、それが「経験的一般化」¹⁶⁾ である。ユニットについての「経験的一般化」も、同様なものであると考えておく。「経験的一般化」は高い説明的価値を有している。以上の分析の中心となるのが、「ユニット分析」である。

次に、「エレメント分析」をみよう。具体的な対象は、これをいくらかでも細かくパートやユニットに分解できる。しかし、いくら細かく分解されても、それらは、ある一般的な性質のある特定の値を以って記述され得る。ある条件を充たしているなら、この一般的な性質がエレメントなのである。その条件とは、この一般的な性質が、「記述の枠組み図式」に関連づけられていることである。この様にしてなされる記述との関連で、「分析的法則」¹⁷⁾ をとり出し得ることもある。「分析的法則」とは、各エレメントについての、その値に関する関係の普遍的な様相である。以上が、エレメントの概念についてのパーソンズの考えの概略である。

ところで、パーソンズの「記述の枠組み図式」においては、この様な分析や記述や一般化に際して、どの様な項目が規定されるのだろうか。もとの対象やパートやユニットが定義され、それらの互いの関係のいくつかが定義されるものと思われる。そして、エレメントと、おそらくはその値もまた定義されるものと思われる。ところで「記述の枠組み図式」においては、次の2つの条件が充たされるべきである。「経験的意味」と「体系的意味」(systematic import) の2つの条件がそれ

である。¹⁸⁾ パーソンズは、前者に関連した議論はある程度行なっている。後者については、彼にとってこの条件はむしろ自明の理であると思われる。

Ⅱ. 科学理論におけるエレメントの概念の意義

以上のパーソンズの考えをもとにして、「エレメント分析」について、もう少し組織的な議論をしておく。「記述の枠組み図式」と「体系的意味」の条件との関連についても、あわせて考えておく。

1) エレメント分析について

あるユニットについて、次の記述が得られたとする。

$$P(a) \wedge \text{甲}(3) \wedge K(\text{は}) \wedge \dots \wedge 3(c) \quad 19)$$

この様な記述はアドホックなものであろう。こうした記述をいくら行なっても、科学の目的に十分に資することはできないだろう。科学の目的とは記述と一般化によって説明の機能を遂行することである、と考えておく。一般化と説明のためには「体系的意味」の条件が、ある程度は充たされていなければならない。この条件のある部分は、記述における述語の指定によって充たされる。すなわち、述語の指定によって、エレメントとその値とが定義されるのである。これは、「記述の枠組み図式」においてなされる。そのプロセスを1例を用いて考察してみよう。

述語 $p_1()$ 、 $p_2()$ 、 $p_3()$ 、 \dots 、 $p_n()$ を用意する。そして命題関数 $p_1(x)$ 、 $p_2(x)$ 、 $p_3(x)$ 、 \dots 、 $p_n(x)$ を作る。個体変数 x の変域は集合 A とする。それぞれの命題関数の真理集合を、それぞれ A_1 、 A_2 、 A_3 、 \dots 、 A_n とし、それぞれの集合は互いに素であるとする。そして、 $A_1 + A_2 + A_3 + \dots + A_n = A$ とする。それぞれの命題関数は、個体変数に A のいずれの要素を代入しても、総合的な命題²⁰⁾ となるものとする。そして、それらの命題のいずれについても、その真偽の判定の方法があるものとする。そしてその方法はある程度共通であるとする。²¹⁾ 述語 $p()$ を用意する。そして、 A の任意の要素 a について、次のことが言えるとする。

$$p(a) \Rightarrow p_1(a) \vee p_2(a) \vee p_3(a)$$

れていれば、この様な一般法則を組織的に取り出すことができる。テクニカルな意味での「理論の体系」は、この様にして形成されるであろう。

この様にして取り出された一般法則を用いて、現実についての説明を行なうことができることもある。例えば、 $q_1(a)$ の時に $z_2(a)$ である事実は、次の様にして説明される。先程の一般法則 1 と 2, から推論によって、命題 $q_1(a) \rightarrow z_2(a)$ を導くことができると考えて良いだろう。この命題を導くことによって、この事実は説明されたのである。²³⁾ 一般法則を、より高度な一般法則によって説明することが可能なこともある。²⁴⁾ この意味において、パーソンズの「経験的一般化」は彼の「分析的法則」によって説明され得ることがある。彼の「分析的法則」は、高い説明的価値を有する高度な一般法則なのである。

いずれにせよ、高度な一般法則は、高度な「エレメント分析」を前提しているだろう。そして、あらゆる一般法則は、何らかの形の「エレメント分析」を前提していると考えべきであろう。科学理論におけるエレメントの概念の意義はここにある。

Ⅲ. パーソンズの行為の分析の検討の準備

以上の考察に基づいて、パーソンズによる行為の分析を解釈し検討したい。パーソンズの理論のこの部分からは、いくつかの解釈を取り出すことができる様に思われる。ここでは、そのうちの最も基本的なものと思われる解釈を取り出す。混乱をさけるために、次の 8 つの点について、解釈上の約束をしておきたい。

- (1), パーソンズは、「行為理論の枠組み図式」(frame of reference of the theory of action)²⁵⁾ において、行為者 (actor), 自我 (ego), 客体 (object), 志向, 動機づけなどの概念を定義している。これらのいずれを個体定数と考えて、これをユニットとみなすことも可能である。²⁶⁾ ここでは、自我をユニットと考えて解釈を進める。自我とは、記述の中心となっている行為者である。その他の用語は、自我の有するエレメントを語る述部において用いられるも

のと考えておく。

(2), ここでは、ユニットアクトの「エレメント分析」をとり扱う。パーソンズにおいては、この概念は、ここで扱ひ得るに足る定義を与えられてはいない様である。ここでは、ユニットアクトとは、下に述べる 8 ケのエレメントについて特定の値をとる、自我のふるまいである、と考える。しかも、ここでは、かなり短い期間になされるダイアディックなもののみを問題にする。

(3), パーソンズのユニットアクトのエレメントの数は、抽象のレベルを変えることによってさまざまである。ここでは、次の 8 ケのエレメントを抽象し得るレベルを問題にする。

- 1, 動機志向の認知的様式 (cognitive mode of motivational orientation) のエレメント
- 2, 動機志向のカセクシス的様式 (cathectic mode of motivational orientation) のエレメント
- 3, 動機志向の評価的様式 (evaluative mode of motivational orientation) のエレメント
- 4, 価値志向の認知的様式 (cognitive mode of value-orientation) のエレメント
- 5, 価値志向の鑑賞的様式 (appreciative mode of value-orientation) のエレメント
- 6, 価値志向の道徳的様式 (moral mode of value-orientation) のエレメント²⁷⁾
- 7, どの様な評価をするかについてのエレメント
- 8, 評価をするか否かのエレメント

(4), それぞれの動機志向や価値志向の概念は、次の 4 種類の概念のうちのいずれであろうか。

- 1, 個々の行為について抽象されたもの
- 2, いくつかの行為のセットについて抽象されたもの
- 3, 個々の行為についての、個々の用意から抽象されたもの
- 4, いくつかの行為を行なう、一般的な用意や性向から抽象されたもの

ここでは、これらの概念を第 1 の種類の概念と考える。²⁸⁾

(5), それぞれの価値志向の概念は、「標準 (standard) に依拠した志向」という意味に解す

べきであろうか。それとも「標準に依拠しようとする志向」という意味に解すべきであろうか。ここでは、前者の意味に解しておく。²⁹⁾

(6), パーソンズにおいては、価値志向の概念がシンボルや標準の概念から厳密に区別されてはいない様である。³⁰⁾ここでは、価値志向の概念を、C. モリスの「受記号体志向」(interpretant)³¹⁾の概念に近いものと考えておく。

(7), パーソンズにおいては、「標準に依拠(commitment)する」という言い方は、次の2つの意味に解され得る。1つは「標準に則る」という意味であり、いま1つは「標準を参照する」という意味である。ここでは、この両方の意味を使い分けて解釈を進める。

(8), 上記の8ケの全てのエレメントについての記述のためには、実は2つの「記述の枠組み図式」が前提されるものと考えておく。自我が、そのふるまいにおいて、彼のニード充足との関連で記述される時、このふるまいが動機志向のエレメントである。自我が、そのふるまいにおいて、標準への依拠との関連で記述される時、このふるまいが価値志向のエレメントである。ここでは、前者の記述のための「記述の枠組み図式」を「第1の枠組み」と呼び、後者のそれを「第2の枠組み」と呼ぶことにする。

IV. パーソンズのユニットアクトの各エレメントの検討

1) 客体について

上記の8ケのエレメントは、客体への自我の志向というエレメントを分解して得られる。そこでまず、志向の客体の概念を解釈しておきたい。パーソンズは、志向の客体を社会的客体、自然的客体、文化的客体に分類する。社会的客体とは、自我がはたらきかける行為者である。自然的客体とは、自我がはたらきかける行為者以外の事物である。文化的客体とは、自我がはたらきかける文化内容である。標準や法律がその例である。³²⁾ところで、ここでは、自我が現実にはたらきかけている客体を、「直接の志向の客体」と呼んで、客体一般から区別しておく。³³⁾

2) 志向について

自我は、ユニットアクトにおいて、「直接の志向の客体」を、様々の性質を有するものとして、特色づける。それは、彼のニードとの関連においてなされる。「第1の枠組み」で記述するなら、この特色づけが、動機志向の認識の様式のエレメントである。³⁴⁾

自我は、ユニットアクトにおいて、「直接の志向の客体」に「ニード充足の意義」を付与する。それは、彼のニードとの関連においてなされる。「第1の枠組み」で記述するなら、この「ニード充足の意義」の付与が、動機志向のカセクシスの様式のエレメントである。³⁵⁾

動機志向の評価の様式のエレメントについては2つの解釈を取り出しておく。したがって、第4～第8のエレメントについても、2とおりの解釈が可能である。

3) 第1の解釈

かなり短い間隔に、時刻 t_0 と t_1 とをとる。 t_0 はユニットアクトの始まる時刻、 t_1 は終わる時刻とする。自我 a が、 t_0 において、客体 $o_1, o_2, o_3, \dots, o_n$ に対して、志向を始めかけているとする。自我が t_0 から t_1 にかけて行ない得る認識カセクシス、運動 (locomotion)³⁶⁾ の志向について、それぞれいくつかづつの選択肢が、自我に示されているとする。この時、彼はそれぞれについて、1つづつの選択肢を選ぶ。それは、彼のニード充足の長期にわたる最適化の見地でなされる。「第1の枠組み」で記述するなら、この選択の総体が、動機志向の評価の様式のエレメントである。

それぞれの選択肢の言語的表明は、下記のとおりであるとする。

認識について

1. $f_1(a, o_1)$
2. $f_2(a, o_1)$
- ∴ ∴
- $f_{mf}(a, o_2)$
- ∴ ∴
- $f_{nf}(a, o_n)$

カセクシスについて

1. $g_1(a, o_1)$
2. $g_2(a, o_1)$
- ∴ ∴

- $g_{mg}(a, o_2)$
- ∴ ∴
- $g_{ng}(a, o_n)$
- 運動について
- 1. $h_1(a, o_1)$
- 2. $h_2(a, o_1)$
- ∴ ∴
- $h_{mh}(a, o_2)$
- ∴ ∴
- $h_{nh}(a, o_n)$

この時、現実になされた自我の志向の言語的表明は、それぞれ下記のとおりとする。

- $f_1(a, o_1)$
- $g_1(a, o_1)$
- $h_1(a, o_1)$

ところで、評価がなされる場合には、自我は、通常、認識的標準、鑑賞的標準、道徳的標準のいずれかに依拠する。³⁷⁾ この時に自我に課せられている規範としてのそれぞれの標準の言語的表明は下記のとおりであるとする。

- 認識的標準 $O_f(a, o_1)$
- 鑑賞的標準 $O_g(a, o_1)$
- 道徳的標準 $O_h(a, o_1)$ ³⁸⁾

この時には、次のうちの少なくとも1つのことが言えるのである。

- 1, $f_1(a, o_1) \Rightarrow f(a, o_1)$
- 2, $g_1(a, o_1) \Rightarrow g(a, o_1)$
- 3, $h_1(a, o_1) \Rightarrow h(a, o_1)$

記号⇒は左辺による右辺の意味的な含意を示す

第1のことが言える場合には、自我は、「直接の志向の客体」の特色づけにおいて、認識的標準に則ったのである。「第2の枠組み」で記述するなら、この則りが、価値志向の認識的様式のエレメントである。³⁹⁾

第2のことが言える場合には、自我は、「直接の志向の客体」への「ニード充足の意義」の付与において、鑑賞的標準に則ったのである。「第2の枠組み」で記述するなら、この則りが、価値志向の鑑賞的様式のエレメントである。

第3のことが言える場合には、自我は、「直接の志向の客体」に対する運動において、道徳的標準に則ったのである。「第2の枠組み」で記述するなら、この則りが、価値志向の道徳的様式のエレメントである。

ところで、パーソンズにおいては、道徳的標準は、どの標準に依拠するかについての標準でもある。ここでは、これを「メタ標準」と呼んで、上記のものから区別しておく。⁴⁰⁾ ここでは、「メタ標準」とは、上記の3種類のいずれの標準に則るかについての標準である、と考えておく。この場合には、これらの標準に則るやり方には、7つのケースがある。それらの言語的表明は、下記のとおりとする。

- 1. $i_1(a)$, 2. $i_2(a)$, 3. $i_3(a)$, 4. $i_4(a)$
- 5. $i_5(a)$, 6. $i_6(a)$, 7. $i_7(a)$

この時、自我が実際に行なった標準への則りの言語的表明は、 $i_1(a)$ であるとする。この時彼に課せられていた規範としての「メタ標準」の言語的表明は、 $O_i(a)$ であるとする。この場合には、 $i_1(a) \Rightarrow i(a)$ といえるのである。この時に彼は、認識的標準や鑑賞的標準や道徳的標準に則るそのやり方において、「メタ標準」に則ったのである。「第2の枠組み」で記述するなら、この「メタ標準」への則りが、「メタ価値志向」と呼びたいところのエレメントである。どの様な評価をするかについてのエレメントとは、ここでは、このエレメントのことである。

ところで、志向が選択肢から選ばれたものとしてはなされず、したがって自我が一切の標準にも則らない様なユニットアクトもある。ここに、評価をするか否かのエレメントが認められるのである。

以上が、動機志向の評価の様式のエレメントの第1の解釈と、それに基づいた第4～第8のエレメントの解釈である。⁴¹⁾

4) 第2の解釈

かなり短い間隔に、時刻 t_0 と t_1 と t_2 とをとる。 t_0 がユニットアクトの始まる時刻、 t_2 が終わる時刻とする。自我は t_1 にいるものとする。彼は t_0 から t_1 の間に、すでにいくつかの認識とカセクシスを行なったとする。それらの言語的表明は第1の解釈におけるものに準拠することにする。この時、彼は、 t_1 から t_2 にかけて行なうべき運動について、いくつかの選択肢を示されているとする。その言語的表明は、第1の解釈におけるものに準拠することにする。この時、自我は、すでに行なった認識やカセクシスと、運動の選択肢につい

ての吟味をする。それは、自我のニード充足の長期にわたる最適化の見地でなされる。「第1の枠組み」で記述するなら、この吟味の総体が、動機志向の評価の様式⁴²⁾のエレメントである。この時、彼は、少なくとも1つずつの認識とカセクススを重視し、1つの運動の選択肢を選ぶ。それらの志向の言語的表明は、下記のとおりとする。

$$f_1(a, o_1)$$

$$g_1(a, o_1)$$

$$h_1(a, o_1)$$

この時、彼に課せられている3種類の規範としての標準の言語的表明は、第1の解釈におけるものに準じることとする。さて、この時に自我の行なう吟味には、次の3つの言語的表明の可能な事実のうちの、少なくとも1つの事実を尊重することが含まれている。

$$1. f_1(a, o_1) \Rightarrow f(a, o_1)$$

$$2. g_1(a, o_1) \Rightarrow g(a, o_1)$$

$$3. h_1(a, o_1) \Rightarrow h(a, o_1)$$

自我が第1の事実を尊重したとする。この時、彼は、認識的標準⁴³⁾を参照したのである。「第2の枠組み」で記述すれば、この参照が、価値志向の認識の様式のエレメントである。

自我が第2の事実を尊重したとする。この時、彼は、鑑賞的標準を参照したのである。「第2の枠組み」で記述すれば、この参照が、価値志向の鑑賞の様式のエレメントである。

自我が第3の事実を尊重したとする。この時、彼は、道徳的標準を参照したのである。「第2の枠組み」で記述すれば、この参照が、価値志向の道徳の様式のエレメントである。

ところで、この場合には、3種類のどの標準を参照するかについての「メタ標準」への自我の則りが、「メタ価値志向」のエレメントとなる。このエレメントに関するその他の点についての解釈は、第1の解釈に準じることとする。

最後に、自我が、認識やカセクススを一切吟味せず、運動が選択肢からの選択としてはなされないか否かのエレメントが、第8のエレメントである。つまり、これが、評価をするか否かのエレメントである。

以上が、動機志向の評価の様式のエレメントの第2の解釈と、それに基づいた第4～第8のエ

メントの解釈である。⁴⁴⁾ いずれの解釈をとるにせよ、8ケのエレメントは、次の意味において、ヒエラルヒーをなしている。つまり、あるユニットアクトが、あるエレメントのある値をとることによって、別のエレメントが値をとられたりとられなかったりすることがあるのである。この意味において、第8のエレメントは、第3～第7のエレメントを支配している。⁴⁵⁾ 第7のエレメントは、第4～第6のエレメントを支配している。8ケのエレメントのうちのいずれについて値をとるかによって、ユニットアクトを次の8つのタイプに分類することができる。x₁～x₈の記号は、当該のタイプのユニットアクトが、第1～第8のエレメントのそれぞれについて、値をとることを示すものとする。

$$1. x_1, x_2, x_8$$

$$2. x_1, x_2, x_3, x_4, x_7, x_8$$

$$3. x_1, x_2, x_3, x_5, x_7, x_8$$

$$4. x_1, x_2, x_3, x_6, x_7, x_8$$

$$5. x_1, x_2, x_3, x_4, x_5, x_7, x_8$$

$$6. x_1, x_2, x_3, x_5, x_6, x_7, x_8$$

$$7. x_1, x_2, x_3, x_4, x_6, x_7, x_8$$

$$8. x_1, x_2, x_3, x_4, x_5, x_6, x_7, x_8^{46)}$$

第7、第8のエレメントと、「型の変数」の値として定義されているものを除いて、いずれのエレメントも、その値まで定義されている訳ではない。そして、第II節で述べた厳密な意味においては、どのエレメントも、完全な定義を与えられている訳ではない様である。これらのエレメントは、解釈を待ってはじめて具体的、経験的な意味をもつ、理論上のエレメントであると考えられるべきかもしれない。⁴⁷⁾ いずれにせよ、これらのエレメントをもとにして、現実についての記述を行なうのは、パーソンズに続く人々の仕事であろう。さらに、それらの記述との関連で、テクニカルな意味での「理論の体系」を構築し、これを説明に供することこそ、我々の仕事である様に思われるのである。

おわりに

パーソンズの理論に関しては、多くの人々によって、いろんな研究がなされて来た。彼の理論の応用や、彼の理論に対する超越的な批判において

は、かなりの成功が収められている様である。しかし、彼の理論に対する内在的な批判においては、それほど成果があがっているとは思われない。内在的な批判においては、彼の理論の主要概念を精密に分析し、その理論を組織的に分析することが必要なのである。この意味において、実は、本稿は、そうした仕事の出発点を探る試みの1つだったのである。⁴⁸⁾

註

- 1) ルドルフ・カルナップ, 永井成男他訳, 意味と必然性, 紀伊国屋書店, (1974), p. 19.
- 2) Talcott Parsons and Edward A. Shils (eds.), *Toward a General Theory of Action*, Harper & Row, (1962).
- 3) Talcott Parsons, *The Social System*, The Free Press, (1968).
- 4) Talcott Parsons, *The Structure of Social Action*, The Free Press, Vol. I II, (1968).
- 5) Talcott Parsons, Robert F. Bales, Edward A. Shils, *Working Papers in the Theory of Action*. The Free Press, (1953), pp. 163—269.
- 6) T. Parsons, E. A. Shils, Kasper D. Naegle, Jesse R. Pitt (eds.), *Theories of Society*, The Free Press, Vol. I, (1961), pp. 30—79. Talcott Parsons, *Societies*, Prentice-Hall, (1966), pp. 5—29. Talcott Parsons, *The System of Modern Societies*, Prentice-Hall, (1971), pp. 4—28.
- 7) Talcott Parsons, Übersetzt von Maria Maysler und Wolfgang Kaupen, “Die Jüngsten Entwicklungen in der Structurell-Functionalen Theorie,” *Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozial-Psychologie*, XVI Jahrgang, (1964), ss. 30—49.
- 8) Parsons and Shils (eds.), op. cit., pp. v—viii, pp. 3—4.
- 9) Talcott Parsons, *Essays in Sociological Theory*. Revised Edition, Collier-Macmillan, (1964), pp. 212—237.
- 10) ウェルナー・ハイゼンベルグ, 柳瀬睦男訳, 現代科学における抽象化, 岩波「科学」, Vol. XXXVII, (1967), pp. 334—341.
- 11) Ralf Dahrendorf, *Gesellschaft und Freiheit*, R. Piper & Co. Verlag, (1961), s. 74.
- 12) この部分の解釈に際しては、特に次の3人の解釈を適宜参照する。高名な社会学者が厳密な解釈を試みたものとして、シュプロットのものを選んだ。分析哲学に明るいと思われる哲学者の解釈として、マックス・ブラックのものを選んだ。ロバート・デュビンの解釈は、パーソンズ自身が高く評価している。Talcott Parsons, *Sociological Theory and Modern Society*. The Free Press, pp. 192—219, pp. 521—536.
- 13) Parsons, *The Structure of Social Action*. op. cit., p. 30.
- 14) Ibid., p. 30.
- 15) ユニットという用語は、ひとまずプリミティブタームとしておく。
- 16) Ibid., p. 33.
- 17) Ibid., p. 36.
- 18) Carl G. Hempel, “Fundamentals of Concept Formation in Empirical Science,” *International Encyclopedia of Unified Science*, University of Toronto Press, (1967).
- 19) 論理学の記号の使用においては、矢野健太郎, 集合共立出版, 昭和48年. 中谷太郎, 論理, 共立出版, 昭和42年に主として準じた。
- 20) ウェスリー・C・サモン, 山下正男訳, 論理学, 培風館, 昭和46年, pp. 139—145.
- 21) P・W・ブリッジマン, 今田恵, 石橋栄訳, 現代物理学の論理, 創元社, 昭和16年.
- 22) Hempel, op. cit., pp. 50—78.
- 23) これは「演えきの一法則的説明」の一例である。カールG・ヘンベル, 黒崎宏訳, 自然科学の哲学, 培風館, 昭和46年, pp. 80—87. カール・ヘンベル, 長坂源一郎訳, 科学的説明の諸問題岩波書店, (1973).
- 24) ナーゲル, 松野安男訳, 科学の構造, 第1編, 明治図書, (1968), pp. 49—54.
- 25) Parsons and Shils (eds.), op. cit., pp. 4—8, pp. 53—76. Parsons, *The Social System*, op. cit., pp. 3—23. この枠組みは、その記述的意義においては、「記述の枠組み図式」にほぼ匹敵する。
- 26) パーソンズは、志向をエレメントと考える場合もある。Parsons and Shils (eds.), op. cit., p. 58. 彼がユニットアクトをユニットと考えることもある。Parsons, *The Structure of Social Action*, op. cit., p. 43. 彼が、目的や規範をエレメントと考えることもある。Ibid., p. 35.
- 27) Parsons and Shils (eds.), op. cit., pp. 58—60.
- 28) Ibid., p. 60の5行目では、価値志向の概念は、第1の概念として用いられているとも思われる。Ibid., p. 65の23～24行目においては、志向の概念は、第2の概念として用いられている様である。パーソンズは、これらの概念を主として第4の概念として用いる様である。マックス・ブラックは、志向の概念を第4の概念として解釈している。Max Black (ed.), *The Social Theories of Talcott Parsons*, Prentice-Hall, (1961), p. 272. ただ、これらの概念を第4の概念と考えると、これらのエレメントがユニットアクトにおいて値をとられるとは考えにくくなるのである。
- 29) 価値志向の概念の定義の仕方については、パーソンズとクライド・クラックホーンの間には微妙なちがいがあられると思われる。クラックホーンは、この概念と“desirable”の概念との関連を重視している様である。パーソンズはその点に重点をおかないで、標準へのcommitment ということによってもっぱらこの概念を定義している。Clyde Kluckhohn and Athers, “Values and Value-Orientations in the Theory of Action”, *Toward a General Theory of Action*, op. cit.
- 30) 例えば、ほぼ同じ項目を示すのに、次の4種類の表現がなされる。“systems of value-orientation”, Parsons and Shils (eds.), op. cit., p. 21の25行目. “Systems of value-orientation standards”, Ibid., p. 163の21～22行目. “Evaluative Symbols”, Ibid.,

- p. 170の4行目。"Patterns of Value-orientation", Parsons, *The Social System*, op. cit., p. 379の35行目。ちなみに、ここでは標準という用語は、ひとまずプリミティブタームとしておく。
- 31) Charles Morris, "Foundations of the Theory of Signs", *International Encyclopedia of Unified Science*. The University of Toronto Press, (1964). C・モリス, 寮金吉訳, 記号と言語と行動, 三省堂, 昭和35年, p. 20. Charles Morris, *Signification and Significance*, The M. I. T. Press, (1970). モリスは, 本書 pp. 56—60 においてパーソンズの理論を紹介し, 彼との共通点を認めている。パーソンズは, Parsons, Bales, Shils, op. cit., p. 32 において, モリスの記号論を参照している。
- 32) パーソンズの文化的客体の概念については, 他日詳論したい。
- 33) こうしてはじめて, ここで扱うエレメントが, 現実の行為において特定の値をとられると考えやすくなるのである。
- 34) パーソンズにおいては, これ以外の自我の認識の作業や知的作業も, このエレメントに含まれている様である。ここでは, そうした部分の解釈は保留する。特に Parsons and Shils (eds.), op. cit., pp. 70—71を参照。
- 35) カセクシスの概念については, パーソンズとトルマンとマレイとの間には微妙なちがいがいる様に思われる。マレイは, この概念と "valence" の概念とを, かなり近い意味で用いている様である。Henry A. Murray, "Toward a Classification of Interactions", *Toward a General Theory of Action*, op. cit. トルマンは, この概念と信念の概念との関連を重視している様である。Edward C. Tolman, "A Psychological Model", *Toward a General Theory of Action*, op. cit. さて, パーソンズは「直接の志向の客体」以外にも, いろんなものにカセクシスが注がれると考えている様であるが, ここではそれらの解釈は一応保留する。
- 36) locomotion というのはトルマンの概念である。この概念は, パーソンズにおいてはレジデュアルカテゴリーとなっている。この部分のパーソンズの理論の解釈のためには, このカテゴリーに光をあてる必要があるものと思われる。Parsons and Shils (eds.), op. cit., p. 11 の "effort" という用語などを参照。Edward C. Tolman, op. cit. を参照。
- 37) もちろん, 自我が標準から逸脱することもある。しかしここではそうしたケースは一切解釈にはとり込まない。それは, パーソンズの理論のこの部分では, 逸脱の概念がほとんど欠如しているからである。
- 38) 記号 "O" は, 当為の義務論的演算子である。藤本隆志, 価値の認識と論理, 岩崎武雄他編, 講座現代哲
- 学入門, 第IV巻, 有信堂, (1970), pp. 104—105.
- 39) この則りは, 「第1の枠組み」によっても記述できるだろう。その場合には, それは標準に則ろうとする自我のニードとの関連で記述される動機志向のエレメントとなるであろう。
- 40) この区別をしておかないと, パラドックスが生じ得る。
- 41) 第1の解釈は, Parsons, *The Social System*, op. cit., の p. 7 などを中心にして取り出し得る。キーワード "alternatives" について, locomotion の "alternatives" のみを重視すれば, 第2の解釈が重要となる。認識やカセクシスの "alternatives" をも重視すれば, 第1の解釈が重要となる。
- 42) パーソンズは, しばしば「客体を評価する」という言い方を重視するが, これは混乱をまねきやすい言い方である。むしろ「行為や志向を評価する」という言い方のほうが無難である。この点については, シュプロットの解釈に賛成したい。W. J. H. Sprott, "Principia Sociologica", *British Journal of Sociologr*, Vol. III, (1952), pp. 203—221.
- 43) 認識的標準のうち, パーソンズは, 真偽の標準のみを重視している様に思われる。後に, そのために, 「型の変数」の定義において, 重要な問題が生じてくるのである。
- 44) 第2の解釈は, 主として Parsons and Shils (eds.), op. cit. を中心にして取り出し得る。
- 45) デュビンは, この意味でのエレメントの支配が law によってとり扱われるものと考えている様であるが, その点は賛成できない。この意味でのエレメントの支配は, 定義によって規定されているのである。Robert Dubin, "Parsons Actor", *American Sociological Review*, Vol. XXV, (1960), p. 466. デュビンの解釈には, この他にもいくつかの疑問点がある。それは, 1つには彼が細かい点にまで立ち入った解釈を試みたことに起因していると思われる。
- 46) パーソンズ自身が, これらの8つのタイプのユニットアクトを, はっきりと示しているのではない。彼の使用する分類基準を厳密に適用すれば, この分類が得られるのである。Parsons and Shils (eds.), op. cit., p. 75 などを参照。
- 47) ルドルフ・カルナップ, 沢田允茂他訳, 物理学の哲学的基礎, 岩波書店, (1972), pp. 229—282. Richard C. Sheldon, "Some Observations on Theory in Social Science," *Toward a General Theory of Action*, op. cit.
- 48) パーソンズが, 彼の理論の基礎としている広く深い学識の故に, その解釈のためには, 多くの人々からの御教示が有益であった。